





東京文化財研究所は、独立行政法人国立文化財機構の組織の一つで、無形の文化財を含む文化遺産全般の調査研究、保存科学・修復技術に関する調査研究、文化遺産に関する国際協力を行う機関です。

表紙解説

ブータン東部のヤクチャム（サクテン地域）

ブータン王国の東部メラ・サクテン地域にはヤクをモチーフとした舞踊「ヤクチャム」が伝承されています。竹の枠にヤク毛の胴幕を張り、背にはこの地を開いた女神と同一視される護法尊が乗ります。中に2人が入って演じる様子は、獅子舞によく似ています。人々はヤクの遊牧を生業としており、舞にも遊牧の知識や信仰が反映されています。こうした無形文化遺産の地域社会における継承を考えることが、私たちの研究の一つです。

裏表紙解説

畑倉の神楽（山梨県大月市賑岡町畑倉）

2025年に発表された統計によれば、山梨県下の民俗芸能は、全379件の約3割が休止・廃絶、約2割が危機的状況にあるといます。特にコロナ禍以降、継承できなくなる民俗芸能は、全国的に増えています。こうした無形文化遺産をどのように未来に残すのか、極めて緊急の課題となっています。

（無形文化遺産部 久保田裕道）

目次

- 02 東文研デジタルアーカイブ事業の開始
- 04 形に残らない文化遺産を「記録」して「活用」する
- 06 近代文化遺産の調査—航空資料保存の現場から
- 08 国際研修「紙の保存と修復」

COLUMN

- 10 わたしの調査道具
B5判リングノート
- 10 輪島市町野地区・粟蔵のお祭りに行ってきました！
- 11 文化財を守る鍵は、空気の通り道にある
—風を読む人は、環境管理を制す
- 11 映画のなかのアジアの街・建築 第3回
過去と今、リアルとフィクションが溶けあうアジアの旅
—「グランドツアー」
- 12 東文研の「中の人」紹介します
- 13 閲覧室利用案内
- 13 活動報告
- 13 研究活動支援のお願い





東文研デジタル アーカイブ事業の開始

東京文化財研究所は昭和5（1930）年から文化財の調査研究を実施しており、文化財に関する図書や雑誌といった文献資料のほか、文化財の調査写真、伝統芸能や祭礼の音声・映像記録などを所蔵しています。また近年では貴重な資料を研究者のご遺族からご寄贈いただくことも増加しています。こうした資料には、ガラス乾板、写真

フィルム、映像フィルム、SPレコードなどのアナログ資料が多数含まれており、保存環境の維持にも努めていますが、アナログ資料は劣化を免れることができません。そのため、デジタル化作業を行い、画像・映像・音声データとして後世にも活用できる状態にすることが求められています。令和5（2023）年に施行された改正博物館法で

【写真1】ガラス乾板写真の保存処置

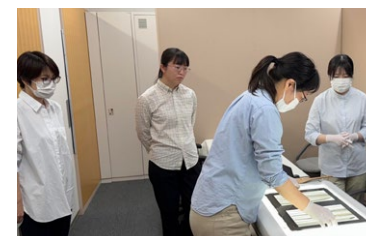
は、デジタルアーカイブの作成と公開が博物館の事業として位置付けられました。当研究所が属している独立行政法人国立文化財機構は地方公共団体や博物館などの調査研究業務を支援・協力することが法律で規定されており、全国の博物館の業務に役立つようなデジタルアーカイブを構築し公開することが当研究所の使命であると考えています。

こうした状況において、今年度より東京文化財研究所デジタルアーカイブ事業を正式にスタートさせました。戦後から撮影してきた文化財の調査写真（4×5モノクロフィルム）3万枚のデジタル化を行っているほか、平成21（2009）年に寄贈されて以降予算不足などから手付かずだった、日本刀を撮影した大型のガラス乾板写真についてデジタル化を実施するための保存処置に着手しました。また音声・映像記録についてもデジタル化作業を推進し、こうした膨大なデータを安全に保管し、公開アーカイブとして運用していくためのストレージやサーバの構築なども進めています。さらに、刀剣のガラス乾板写真については単純にデジタル化するだけではなく、茎に刻まれた銘文を集めたデータベースを新たに制作することも構想しています。時代や作者などが判明している日本刀の「文字」にどのような特徴があり、変遷していくのかということが一目瞭然となり、新たな研究として発展させることができると考えています。この事業は10か年の計画でまだ始まったばかりですが、整理や準備ができたところから、東文研総合検索などで公開していく予定です。拡充し続ける東文研デジタルアーカイブにご期待ください。

（文化財情報資料部 江村知子・月村紀乃）



【写真2】東京文化財研究所所蔵の
4×5モノクロフィルム



【写真3】ガラス乾板写真保存処置
についての協議



【写真4】資料閲覧室の研究資料写真



【写真5】刀剣の紙焼き写真

形に残らない文化遺産を 「記録」して「活用」する



[写真1]
実演記録「宮菫節」収録の様子
(左 | 宮菫千碌氏、右 | 宮菫千佳寿弥氏)

無形文化遺産部では、古典芸能や工芸技術、地域に伝わる民俗芸能や民俗技術など、人から人へと受け継がれてきた無形の文化遺産について調査研究を行っています。こうした文化遺産はそのままでは形に残らないため、記録撮影によって映像で残す手法も用いています。

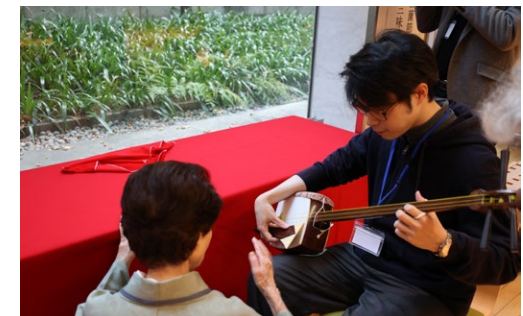
例えば古典芸能や話芸などの無形文化財については、一般に披露される機会の少ないジャンル、演目を選んで「実演記録」事業を実施しています。この事業の一環として、宮菫千碌氏、宮菫千佳寿弥氏（ともに国の重要無形文化財「宮菫節」の各個認定保持者・いわゆる人間国宝）を迎えて、平成30（2018）年より「宮菫節」の記録撮影を継続しています〔写真1〕。こうして蓄積された映像は所内の閲覧室で視聴することができ、研究や教育・普及、継承に役立てられます。なお、記録映像の冒頭部分は当研究所ウェブサイトでも公開しています。

また記録映像を活用して公開学術講座を開催することもあります。令和5（2023）年の第17回公開学術講座では、宮菫節を取り上げ、宮菫節に関する研究報告や、宮菫千碌氏と宮菫千佳寿弥氏を迎えた座談会〔写真2〕や実演記録の部分上映を行いました。ロビーでは宮菫節の舞台で使う見台や三味線、資料の展示や、宮菫節三味線体験コーナーも設け〔写真3〕、報告書も刊行しました。

このように無形文化遺産部では、形に残らない文化遺産を記録し、その成果を幅広く活用できるような事業を展開しています。

（無形文化遺産部 前原恵美・鎌田紗弓）

(上) [写真2]
第17回公開学術講座の座談会
(下) [写真3]
第17回公開学術講座の
宮菫節三味線体験コーナー



ウェブ公開中の
実演記録



公開学術講座
「宮菫節の魅力を探る」
報告書

近代文化遺産の調査 —航空資料保存の現場から

私たちのまわりにある機械や道具、乗り物や工業製品——

こうした“ちょっと新しいもの”は、どこか「文化財」という言葉とは結びつきにくい印象があるかもしれません。

でも実は、こうした近代以降の工業製品にも、当時の人びとが未来へつなごうとした技術の工夫や、社会の歩みを語る大切な記録が多く詰まっています。だからこそ、これらは“文化財”として大切に

守り、次の世代へ伝えていくべき貴重な歴史資料なのです。

保存科学研究センターでは、その中でも特に航空機をはじめとした「航空資料」の保存の協力も行っています。

例えば、鹿児島県南九州市・知覧特攻平和会館に展示されている「疾風」(市指定文化財)は、戦時中にフィリピンで米軍に鹵獲された、現存唯一と考えられるとても貴重な機体です。

平成29(2017)年度から南九州市が保存状態の調査を始め、平成30(2018)年度からは私たちも調査に参加し、オリジナル部材の残り具合の確認や、将来の修復方針の検討を続けています。3Dによる形状の記録、有機化学分析による材料の理解まで、多角的な方法で資料の情報を調査しています。また、機体の保存のために、文化財としては珍しく“エンジンオイルの交換”といった機械ならではの作業も必要となります。

その他、アジア・太平洋戦争期には多くの遺構(戦争遺跡)が全国に残されています。南九州市内にも当時のコンクリート構造物がいくつか現存しています

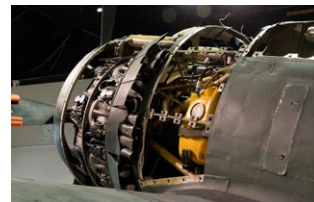
が、終戦から80年近くが経ついま、風雨による劣化で表面が剥がれ落ちるなど、保存が難しくなっています。

調査では、旧知覧飛行場の給水塔(市指定文化財)や、旧青戸飛行場のトーチカ(防御陣地)などの、周辺の環境計測に加え、フォトグラメトリによる三次元モデル記録を行い、現在の情報を“未来へ残す”作業を進めています。

(保存科学研究センター
芳賀文絵・千葉毅・犬塚将英)

※東京文化財研究所では、研究活動で記録した文化財の3DモデルをSketchfabなど3Dマップロードしています。
<https://sketchfab.com/tobunken>

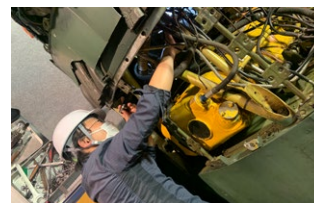
[写真1] ^{はやくて}「疾風」
(市指定文化財)
エンジンのカウル、機体のパネルを取り外して機体内部の調査を行っています。



[写真2] 保存方針の協議
各分野の専門家を確認しながら、保存方針を決定しています。



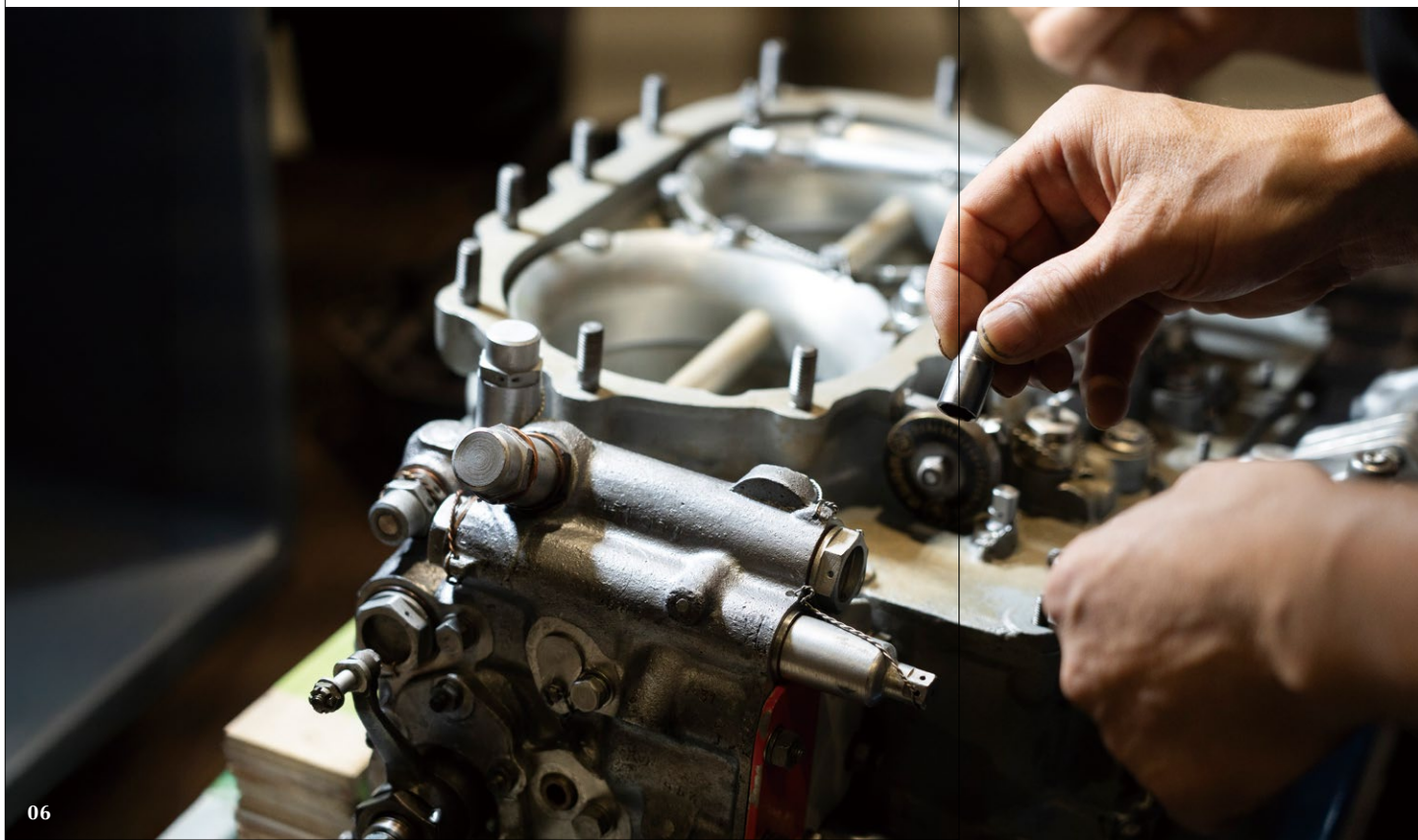
[写真3] 記録保存
機体内部、取り外した機器の記録をできるだけ正確に行えるよう、様々な角度から調査を進めています。



[写真4] 防錆剤の噴霧
資料の錆が進行しないよう、丁寧に汚れを落とし、防錆処置を施します。



[写真5] キャブレター(左図)
機器は多くの金属部品が組み合わされて構成されています。それらを一一つ分解して点検し、保存の処置を進めています。



国際研修「紙の保存と修復」

和紙は、文化財の修復材料として優れていると国際的にも評価されています。しかし、和紙や和紙を用いた修復技術についての正しい知識、経験を得る機会は少ないのが現状です。

東京文化財研究所では、国際研修「紙の保存と修復」を開催し、正しい知識や技術の共有を通じ、紙文化財の保存修復に貢献しています。この国際研修は、平成4（1992）年に始まり、当研究所とICCROM（文化財保存修復研究国際センター）の共催で、主に紙の保存修復の専門家を参加者としてきました。研修では講義、実習の他に、和紙の産地、修復現場、伝統的建築などを訪れ、和紙の歴史や製法、和紙の使用法、保存修復の歴史や環境などに直接触れます。

さらに、派生として「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」をCNCPC-INAH（メキシコ国立人類学歴史機構-国立文化遺産保存修復機関）、当研究所及びICCROMによる3者共催で、平成24（2012）年よりメキシコシティにおいて開催しています。北米、欧州に比べ文化財保存修復に関する研修や、情報交換の場が少ないとされる地域で開催することで、この地域での紙文化財の保存修復に貢献することを目的としています。この研修は、国際研修で学んだことのあるメキシコ専門家やスペイン、ラテンアメリカの専門家がスタッフ、講師として参加してきました。

これらの研修ですが、過去の参加者の高評価もあってか、ますます盛況になってきており、近年は両研修合わせて19人の参加者枠に350人を超える応募があります。予算や時間の制限などあり、これ以上に枠を広げることはできませんが、研修を続けることにより、国際的な需要にこれからも応えていきたいと考えています。

（文化遺産国際協力センター 副島まどか・加藤雅人）



【写真1】研修開講日
研修生、INAHチーム、ICCROM関係者、東文研チームが一堂に会しての記念撮影の様子です。



【写真2】糊吹きの実習
修復に用いる小麦粉でんぷん糊を、炊き上げていきます。段階ごとにサンプルを採取し、最適な加減について学びます。



【写真3】仮張りの実習
東アジア独自の乾燥方法である仮張りについて、その方法と効果を学んでいる様子です。



【写真4】本美濃紙の
工房での見学風景
原料であるコウゾについて、
本美濃紙の紙すき職人の方から、
実物を見ながら学んでいきます。



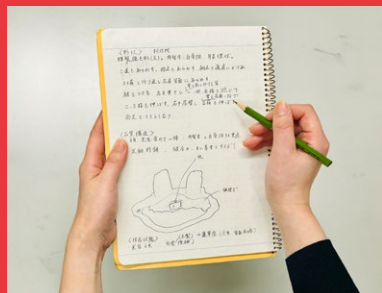
【写真5】刷毛に関する講義
修復に欠かせない
道具である刷毛について、
日本でも数少なくなった
刷毛製作者による実演を
交えて学びます。

COLUMN

わたしの調査道具 B5判リングノート

「文化財の調査」と聞くと、どんなことを思い浮かべるでしょうか？作品の鑑定？時代や作者を判定して値段をつけるの？などと想像する方もいらっしゃるでしょう。実際の文化財調査はいわゆる「鑑定」とは異なります。例えば、私が専門としている仏教絵画や彫刻の調査では、まずは対象をよく観察して客観的な事実を記録していきます。その際に大切なのが調査記録です。作品の形状や法量（サイズ）、そして保存状態や銘文など確実なことだけを書き込んでいきます。もちろんその場で作者や時代についても考えますが、限られた時間で法量を測ったり撮影をしたりと調査は意外と忙しいのです。調査から戻って、改めて作品についてあれこれ考えるためにも調査記録はとても大切です。私が長年愛用しているのはリング式のB5判ノート。固い背表紙があるので立ったままでも安定して書き込める、欠かせない相棒です。

（文化財情報資料部 米沢玲）



輪島市町野地区・粟蔵の お祭りに行ってきました！

令和6（2024）年1月の能登半島地震の発生以来、石川県や地元市町村の皆さんをはじめ、全国の文化財関係者の協力のもと、地域の歴史や文化を守る「文化財レスキュー活動」が続いています。

粟蔵のキリコも、そうした活動により救出されたもののひとつです。地震後、地元の方からの要請を受け、倒壊寸前の倉庫から運び出して安全な場所でお預かりしていましたが、今年から祭りが再開されることになったので、無事に地元へお返しすることができました。10月4日にはキリコが地区を巡り、久しぶりの祭りに多くの方が笑顔を見せていました。

災害の爪痕はまだ深いものの、地域によっては少しずつ祭り再開の動きが見え始めています。お祭りの力が復興の歩みを後押しすることを願いながら、引き続き現地での活動に取り組んでいきたいと思えます。

（無形文化遺産部 後藤知美）

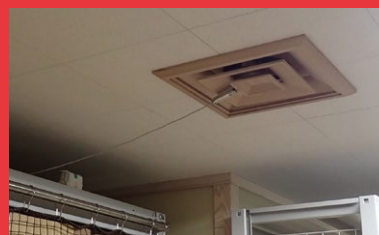


文化財を守る鍵は、空気の通り道にある —風を読む人は、環境管理を制す

大切な文化財を守るためには環境管理が重要です。一方で温湿度のように“見えないもの”ほど、環境管理では手がかりをつかみにくいものです。

その中で、風の通り道を知ることは、文化財を守る環境管理の重要なヒントを与えてくれます。私はよく伸ばし棒に紐を括り付けたタフトを使い、空間の風の流れを読みます。また展示室、収蔵庫にある空調は風の大きな発生源です。吹出口の温度や湿度も測り、どのような風が出ているのかを確かめます。ふわりと揺れるタフトの動きと数字の組み合わせから、温湿度の偏りやエネルギーの無駄が見えてきます。

（保存科学研究センター 水谷悦子）



気流調査の風景

映画のなかのアジアの街・建築 第3回 過去と今、リアルとフィクションが 溶けあうアジアの旅 —「グランドツアー」

グランドツアーは、裕福な家の若者たちが世界を旅して見聞を広げる近代イギリスの文化で、東・東南アジア（“Far East”）の旅は20世紀初頭に流行しました。

映画の舞台も1918年の“Far East”。異国を転々と、婚約者から逃げるエドワードとそれを追うモリーの物語です。熱帯を走る鉄道、ラッフルズ・ホテル、とオリエンタリズムのイメージが連なる…と思いきや、鮮やかな大阪、ホーチミンの大通りなど、アジアのリアルな雑景が散りばめられています。

サマセット・モームの著作『パーラーの紳士』から着想を得たミゲル・ゴメス監督。彼の足跡を追い、4年の歳月をかけ7カ国にて撮影を敢行しました。コロナ禍には各国撮影隊がリモートで映像を収め、チームプレーで完成した、“大きな旅”を経た映画です。

[作品情報]

題名 | グランドツアー

監督 | ミゲル・ゴメス

出演 | ギンサロ・ワディントン、
クリスティーナ・アルファイアテ、他

公開 | 2025年

（文化遺産国際協力センター 黒岩千尋）

東文研の「中の人」紹介します

月村紀乃

文化財情報資料部
研究員

前職では、美術館の学芸員として働いていました。東京文化財研究所では、文化財写真などのアーカイブ化に携わっています。興味の対象は、工芸史、作品の伝来史、文字のかたちなど。出張のたびに、各地のおいしいものに心を震わせています。

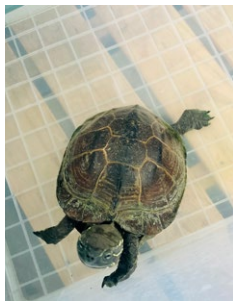


実家の猫たちにもおいしいものを。
(左から) デコリン、ポコリン、もーちゃん

鎌田紗弓

無形文化遺産部
研究員

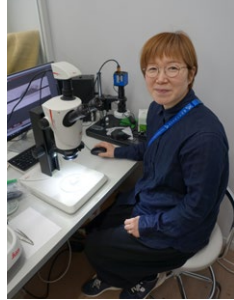
無形文化財(古典芸能)について、紙媒体資料・音声資料など多様な記録の整理・調査や、データ計測に基づく技法の研究などを行っています。休みの日は、長年一緒に暮らしている亀の日なたぼっこを眺めて一息ついています。



一宮八重

保存科学研究センター
アソシエイトフェロー

文化財の修復に関わる用具や原材料の安定的確保にむけて科学分析の側面から携わっています。また、縮緬絵・泥絵などの民画や浮世絵版画の研究もしています。当時の民衆の美術の楽しみ方を探りつつ、技法材料の分析に取り組んでいます。



武瀟瀟

文化遺産国際協力センター
アソシエイトフェロー

こんにちは。日本絵画史を研究しています。特に、中国由来の風景画題「瀟湘しょうしょう八景はっけい」の日本における受容と展開を探ってきました。名前が瀟瀟なのでよく研究テーマとの縁を聞かれますが、実は無関係です。最近絵画に建築や庭園を加え、空間として美術を捉える面白さに魅力を感じています。



閲覧室利用案内

資料閲覧室は文化財に関する調査研究、または学術・文化・教育事業のために所蔵資料を必要とする方にご利用いただけます。詳しい利用方法等はウェブサイトをご覧ください。

<https://www.tobunken.go.jp/joho/japanese/library/library.html>



活動報告

東京文化財研究所のウェブサイトでは、主に研究員が執筆した活動報告を随時掲載しています。文化財を守る調査研究活動の最先端をぜひチェックしてみてください。

<https://www.tobunken.go.jp/materials/katudo>



東京文化財研究所で開催された体験型イベントを視察するバーレーン文化古物局総裁シェイク・ハリーフア王子



ワット・ラーチャプラディットでのタイ文化省芸術局主催の学術セミナー

東京文化財研究所 (TOBUNKEN) では、公式 SNS で最新情報を発信しています。ぜひご覧ください！
また、施設見学も受付中です。
詳細はウェブサイトをご確認ください。



YouTube



Facebook



X (旧Twitter)

研究活動支援のお願い

文化財を後世に伝え残すための研究活動に対し、皆様に広くご寄付をお願いしています。皆様の温かいご支援とご協力を、心よりお願い申し上げます。

東京文化財研究所文化財調査研究基金
<https://www.tobunken.go.jp/japanese/kifukin.html>



TOBUNKEN NEWS



TOBUNKEN NEWS
2026年3月発行

発行 | 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43
<https://www.tobunken.go.jp>
編集 | 研究支援推進部
子ザイン | 内山耀一朗
印刷 | 渡辺印刷株式会社

Facebook | <https://www.facebook.com/NRICPT>
X | https://x.com/tobunken_nich